

●第2回「生理学教育を語る会」報告

昨年の前橋大会で開催した「生理学教育を語る会」を、今年も3月22日(大会2日目)の午後7-10時、都ホテル大阪で開催する運びとなった。昨年よりも多い31名(学生6名)の参加となった。

プログラムとして、久留米大学医学部生理学統合自律機能部門の石松 秀助教授から「生理学実習のIT化」の講演があった。

従来のウシ蛙坐骨神経束標本を使つての実習では、機器が多くなり、操作、配線が複雑であった。ADInstruments社製のPowerLab[®]は1台で刺激、digital記録、測定ができ、導入することにより、実習の効率があがり、実習時間内に簡単に実験結果をグラフ化し考察するなど、実習内容に集中できるようになった。さらにヒトにおける伝導速度の測定なども実習できた。同社では、セットの接続、データの取得、解析までstep-by-stepで学生の生理学実習の進行を支援するLab Tutor[®] system もリリースしている。実習セットをIT化することで教育スタッフ側の人的、時間的、費用的なコストを削減でき、学生にとっては実習内容に集中し、データの取得から解析まで効率よく出来るなど、多くのメリットがある。

また、京都大学医学研究科医学教育推進センターの平出 敦教授から「臨床から期待する生理学教育のあり方」の特別講演があった。

医療をめぐる環境は、大きく変化している。特に臨床研修の必修化は、わが国の医療に大きな影響をおよぼしている。徒弟的な雰囲気での研修制度が改善されて、指導の体制が見直されるなど、好ましい影響も少なくない。しかし、このシステムが本来の国民のニーズとは異なる形で、診療科偏在、地域偏在を促進している一面がある。このよ

うなトレンドの中で、大学院進学トレンド、特に基礎医学を志す学徒が減少していることが懸念される。このような潮流の背景には、科学技術の合理的な適応をよりどころにしていた従来の専門家像の破綻も関連している。こうした中で、若い学徒に対して、基礎研究に関わる魅力や意味について、積極的に発信することは、現在、極めて重要ではないかと考えられる。

さらに、会食の間、自己紹介を兼ねて生理学教育に関する思いを語り合った。熱意の重要性が語られたが、一方で、熱意だけでは解決できない問題も指摘された。同様に、グループ学習における協調性を育む教育が必要である一方、積極的な学生とそうでない学生とで、取り組みが大きく違ってきてしまう問題も指摘された。生理学は、基礎医学との位置づけになるが、臨床研修をも視野に入れておくべきであること、さらに保健学科、薬剤師、栄養士の教育など、テーマは尽きなかった。また、昨年に引き続き、マレーシア大学生理学教授のCheng博士(henghm@ummc.edu.my)が参加し、「アジア医学生理学クイズ大会 Inter Medical School Physiology Quiz (IMSPQ)」において、参加国、参加チーム数(昨年は14)が増えている状況が報告された。今年は、9月の第一か第二土曜日の開催であり、日本生理学会の先生方、医学生さんたちを、見学でも参加でもおもてなししたいとのことであった。

来年度の大会においてもあらたな形で企画したいとの思いをいだきつつ、瞬く間に閉会の時間となった。

松尾 理
渋谷まさと